

やく お薬立ちmemo



「貼り薬」と聞くと、肩や腰の痛みに使う湿布を思い浮かべる方が多いかもしれませんが。実は貼付剤は、単に患部に薬を貼るだけのものから、貼付した部位から全身へ薬を届けることができる製剤へと開発されているものがあります。

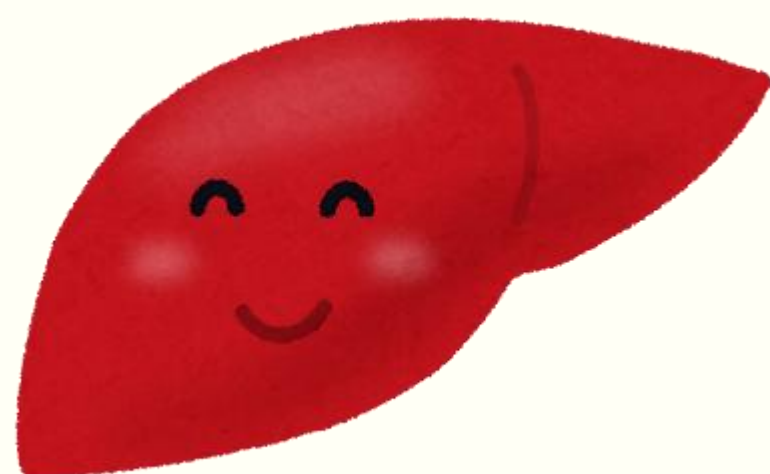
貼付剤には、貼った場所で作用する「局所作用型」と、皮膚から薬を吸収させ、血液を介して全身に作用させる「全身作用型」があります。後者では、薬の放出や皮膚からの吸収を調整することで、薬の効果を長時間安定させることが期待できます。



やく お薬立ちmemo



また、貼付剤には「初回通過効果」を避けられるという特徴があります。少し難しい言葉ですが、飲み薬の場合、薬は胃や腸から吸収された後、まず肝臓を通ります。肝臓は体にとって大切な「薬の処理工場」のような役割をしており、ここで薬の一部が分解されます。これを「初回通過効果」と呼びます。一方、皮膚から吸収された薬は、消化管や肝臓を最初に通ることなく全身の血流へ入るため、この影響を受けにくいのです。そのため、薬の性質によっては、貼付剤という方法が適している場合があります。



やく お薬立ちmemo



現在、まだまだ種類は少ないですが、痛み止め以外にも、アレルギー性鼻炎、更年期障害、狭心症、認知症、パーキンソン病などの治療に貼付剤が利用されています。嚥下が困難となっている患者さんにも使用しやすく、1日1回貼ることで、効果を持続させることが期待されます。

一方で、「貼ればどこでも同じように効く」というわけではありません。皮膚の状態や貼る部位によって薬の吸収が変わることがあり、製剤ごとに貼る場所や交換時期が決められています。貼付部位のかぶれなどにも注意が必要です。

やく お薬立ちmemo



貼付剤の進化は、「薬を飲む」以外の選択肢を増やし、患者さんの状態・生活に合わせた治療を支えることにつながっています。

貼付剤を使用するときは、自己判断で貼る場所や交換方法を変えず、医師や薬剤師の説明に従って使用しましょう。

